

研究活動報告 学生相談室との共催事業 園芸療法 活動報告

著者	友久 茂子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	10
ページ	101-102
発行年	2009-03-31
URL	http://doi.org/10.14990/00002672

学生相談室との共催事業 園芸療法プログラム

学生相談室では、二〇〇〇年度より、人間科学研究所との共同研究事業として、園芸療法に関する二種類の活動を行っている。その一つは、学生を対象に、週に一度自由参加型で実施している「ウィークリーグループ」のプログラムに園芸療法を取り入れ、毎年数回季節に合わせて土や植物に触れる活動である。もう一つは、学外から講師を招き、一般公開の「園芸療法研修会」を開催して、園芸療法に関する知見を深める活動である。

今年度の「ウィークリーグループ」での園芸療法活動を振り返ってみると、前期に二回、後期に二回実施している。一回目の五月には、「春のガーデニング体験」として、学生相談室のある一八号館アプローチを飾る寄せ植えの制作を行った。例年、春の園芸は四月に実施し、ジャガイモの種芋を植える作業をしていたのだが、一八号館の園芸療法スペースに、植木の根がはびこり、利用できる畑が半減したため、昨年からジャガイモの栽培は断念することになった。ジャガイモの収穫作業や塩味のふかしたのは、学生に人気が高かっただけに残念だが、園芸療法スペースそのものの問題を解決しなければ、再開することは難しくそうである。

二回目、六月の「初夏のガーデニング」は、わずかに残った園芸療法スペースにサツマイモの苗を植えつけ、野菜用コンテ

ナーには夏野菜の苗を植えた。夏野菜は生育が早く、育てやすいので毎年植えているが、収穫時は夏休みに入ってしまった、学生が自分で生育を確かめたり、収穫したりすることが出来ず、園芸療法の本来の目的を果たせないため、学生の目に触れる場所を確保し、コンテナを移動させる等の工夫が必要だと考えている。

三回目の十一月には、夏休みも終わり秋の収穫祭として「サツマイモ掘り」を実施している。半減した園芸療法スペースに、所せましと成長した葉っぱを収穫しやすいように刈り整えられたサツマイモ畑で、参加者は鎌とスコップで土深くまで掘って、ダンボール箱いっぱいのは芋を収穫した。今年は、スペースの割には大型のものもあり、参加者は気持ちのよい汗を流すことができたのではないだろうか。その後、芋を洗い蒸し芋にして、一八号館のスタツフにもふるまった。バターをたっぷりつけて口いっぱい頬張る参加者の、ほほえましい姿が見られた。

四回目は一二月に、クリスマスの用の寄せ植えやクリスマスツリーの制作、フラワーアレンジメントをして、ロビーや学生相談室に飾った。一八号館のクリスマススムードを盛り上げるこ

とが出来たのではないかと思われる。

今年度も、春の植え付けから秋の収穫、そしてクリスマスの飾り付けまで、季節の変化を感じることや、味覚、嗅覚など五感を刺激される体験として園芸療法を実施できたが、参加者は平均二名で、四〜五人の固定メンバーが入れ替わり参加しており、新しいメンバーが加わることはなかった。その意味では課題を残しているが、対人関係の苦手な数人がそれなりにコミュ

ニケーションをとりながら土や植物に触れ、ささやかなスローライフを体験できたと思われる。

もう一つの活動である「園芸療法研修会」は、一月二日(金)に、北海道技術コンサルタント川づくり計画室長の岩瀬晴夫氏を招き開催した。もともと川づくりの技術者である岩瀬氏を講師にお招きしたことは、学生相談室における園芸療法のある種の行き詰まり感が出発点になっている。つまり、現代の若者の体験不足や、自然との距離を少しでも補うために、園芸療法という体験型グループワークを開催しても、ほとんどの学生から関心を向けられず、手間の割には充実感を得られないという現実の中で、園芸という小さな枠にとらわれるのではなく、自然を感じ、自然をより身近なものとするための知恵を得たいという思いからである。そこで岩瀬氏に、川づくりから生じてきた自らの心身の変化、自然と心と体のつながりについて、体験を通して語っていただいた。

このような二つの園芸療法関連の催しは決して華々しくはないが、参加者にとっては静かな成果を上げていると思われ、今後もう少しずつ軌道修正しながら、地道に活動を続けていきたい。

(友久 茂子)